

麻雀を語る

南部修太郎

青空文庫

はなし 話はだ**いぶ**古めくが、大**たい**正**しやう**十一年の秋の**あ**或る一夜の**や**ことだ。
 げつ 三ヶ月ほどの**なん**南北支那の**たび**旅を**をは**終つて、**あ**明日は**いよいよ**懐しい**こ**故國
 ふなぢ への**ふなぢ**船路に**つ**就かうといふ**まへ**前の**ばん**晩、それは**ちういろ**乳色の**よもや**夜靄が**まち**町の**ともし**燈
 び 灯を**ほ**のぼのと**させ**るばかりに**た**立ち**こ**罩めた**い**如何にも**いきやう**異郷の**あき**秋
 ばん らしい**ばん**晩だつたが、**ぼく**僕は**せうそくつう**消息通の**い**一友と**つ**連れ**た**立つて**シヤンハイ**上海の
 まち 町を**さまよ**ひ**ある**歩いた。**ま**先づ**スマロ**四馬路の**さいくわん**菜館で**くわんとんれうり**廣東料理に**し**舌
 たつゞみ **たつゞみ**鼓を**う**打ち、**あ**或る**ぐわいこくじん**外國人の**バア**で**リキュウル**を**すすり**、**に**日
 ほんれうりや **ほんれうりや**本料理屋で**げいしやたち**藝者達の**ながさきべん**長崎辯を**き**聞き、**さら**更に**そかい**フランス租界の**ひみつ**秘密

な阿片窟あへんくつで阿片あへんまで吸すつてみた。

「さア、もう一ぺん四馬路スマロの散歩さんぽだ。」

と、お互たがひに微醺びくんを帯おびて變へんに弾はづみ立たつた氣分きぶんで黄包車ワンポイソを驅かり、再び四馬路ふた、スマロの大おほどほり通でへ出たのはもう夜よるの一時過じすぎだつた。

言いふまでもない、四馬路スマロは東京とうきやうの銀座ぎんざだ。が、君子國日くんしこくにほん本のやうに四角四面かくめんな取とり締しまりなどもとよりあらう筈はずもなく、それは字義通りじぎどほの不夜城ふやじやうだ。人間にんげんは動うごく。燈灯ともしびは映發えいはつする。自動車じどうしやは行ゆく。黄包車ワンポオツは走はしる。そして、この東洋とうやうの幻怪げんくわいな港みなとまち町まちはしつとりした夜靄よもやの中なかにも更ふけ行ゆく夜よを知らしない。やがて歩き疲つかれてふらりとあるはひりこんだのが、と或ある裏通うらどほりの茶館ツアコブンだつた。

窓際まどぎはの紫檀しだんの卓たくを挾はさんで腰こしを降おろし、お互たがひに疲つかれ顔がほでぼんやり煙草たばこをふかしてゐると、女をんなが型かたどほ通り瓜クワ子スワと茶ツアを運はこんでくる。ひとりまるがほひとりひとり瓜うり實さね顔がほ、其それに口くちべに赤あか、耳環みくわの翡翠ひすゐが一人は丸顔まるがほ、一人は瓜實顔うりさねがほ、青あをい。支那語しなごの達者たつしやな友人いうじんは早速さつそく笑わらひ聲こゑを交まじへながら女をんなと何なにやら話はなしはじめたが、僕ぼくは至極しごく手持ても無沙汰ぶさたである。傍そばの窓まどをあけて上じやう氣きした顔かほを冷ひやしながら暗くらいそとを見てゐると、一間けんばかりの路次ろじを隔へだててすぐ隣となりの家の同おなじ二階かいの窓まどから、鈍にぶい巷ちまたの雜ざ音ふおんと入れ交まじつてチャラチャラチャラと聞きき馴なれない物ものと音きこが聞きえて來きた。

「おいおい、あの音おとは何なんだい？」

暫しばしく靜しづかに聽き耳みみを立てたててゐた僕ぼくはさう言いつて、友人いうじんの方ほうを振ふ

り返つた。いつの間にか彼の膝の上には丸顔の女が牡丹のやうな笑ひを含みながら腰かけてゐる。が、彼はすぐに僕の指さす方に耳を傾けて、

「ああ、麻雀をやつてるんだよ。」

「麻雀？」

僕がさう鸚鵡返すと同時に、僕の傍にゐた瓜實顔は可憐な聲で、

「好的麻雀……」

と、微笑とともに呟いた。

今でこそ、僕もどうやら四段といふ段位をもらへるほどに麻雀にも耽り親しんでゐるが、かれこれ十年も昔の話だ。奉天

城内じやうないのと或ある勸工場くわんこうぢやうへはひつて、或ある店先みせさきに並ならべてあ

つた麻雀牌マアジヤンパイの美うつくしさに眼めを惹ひかれて、

「綺麗きれいなもんですね。何か飾かぎり物ものですか？」

と、連つれの人ひとに尋たづねかけると、

「いやア、ばくちの道具だうぐですよ。日本にほんのまア花合はなあはせですかね。」

と、幾いくらか笑わらひ交まじりに答こたへられながらも、さすがにばくち好ずきな

支那人しなじんだ、恐おそろしく凝こつた、洒落しやれた物ものを使つかふなアぐらゐにほとほ

と感かん心しんしてゐたやうな程度ていどで、もとよりどんな風ふうに遊あそぶのかも

知らなかつたのだが、さてその窓まどむかう向むかうから時折ときをり談笑だんせうの聲こゑに

交まじつてチャラチャラチャラ聞きこえてくる麻雀牌マアジヤンパイの音おと、そ

れがまたあたりがあたりだけに如何いかにも支那風しなふうの好このましい感かんじで

耳みみに響ひびいたものだった。

近頃ちかごろ、東京とうきやうに於ける、或は日本あるひにほんに於ける麻雀マアジヤンの流りうか

行うは凄まじいばかりで、麻雀俱樂部マアジヤンくらぶの開業かいげふは全く雨後の筍まつたうごたけのこ

の如ごとしで邊鄙へんびな郊外かうぐわいの町まちにまで及んでゐるやうだが、そこは

どこまでも日本式にほんしきな小綺麗こぎれいさ、行儀ぎやうぎよさで、たとへば卓子テーブル

の上うへにも青羅紗あをらしやとか白ネルしろとかを敷しいて牌音パイおとを和やはらげるやうに

してあるのが普通ふつうだが、本場ほんばの支那人しなじんは紫檀したんの卓子テーブルの上うへでちか

に遊ぶあそのが普通ふつうで、寧ろむしさうして牌音パイおとのたか高いのを喜よろこぶらしい、

だからこそ、その時ときも紫檀したんの堅かたい面めんを打うち、またその上うへでひつき

りなしにかち合あふ麻雀牌マアジヤンパイの音おとが窓向まどむかうながらそれほどさはや

かにも聞きこえ、如何いかにも支那風しなふうの快こころよさで僕ぼくの耳みみを樂たのしましたのに違ちが

ひない。

同じ 麻マアジヤン雀クワンでもそれぞれの國民性こくみんせいに従したがつて遊あそび方かたなり樂たのしみ方かたなりが自然しぜんと違ちがつてくるのは當あたり前まへの話はなしで、卓たくし子うへの上うへに布きれを敷しいて牌音ぱいおんを和やはらら本人じんらしさだが、元ぐわん來らい麻マアジヤン雀クワンとは雀すゞめの義ぎで、牌パイのかち合あふ音おとが竹たけ藪やぶに啼なき囀さへづる雀すゞめの聲こゑに似にてゐるから來きたといふ語源ごげんを信しんじるとすれば、やつぱり紫檀したんの卓ていぶる子こでぢかに遊あそぶといふのが本格的ほんかくてきで、その音おとを樂たのしむといふのもちよつと趣おもむきがあるやうに感かんじられる。尤もつとも、支那人しなじんは麻マアジヤン雀クワンを親したしい仲間なかまの一ひと組くみで樂たのしむといふやうに心得こころえてゐるらしいが、近頃ちかごろの日本にほんのやうにそれを團隊だんたい的てき競技きやうぎにまで進すすめて來きて、いつかの日本にほん麻雀マアジヤンセ

選手権大會（んしゅけんたいくわい）の時のやうに百組（くみ）も百五十組（くみ）もの人達（ひとたち）が一堂（だう）に
 集（あつ）つて技（ぎ）を争（あ）ふとなれば、紫檀（したん）の卓子（テーブル）の上（うへ）でぢかになどといふ
 ことはそれこそ殺人的（さつじんてき）なものになつてしまつて、大會（たいくわい）ごと
 に氣（き）が違（ちが）ふ人（ひと）が何人（なんにん）となく出來（でき）るかも知（し）れない。
 とまれ、十年（ねんまへ）前の秋（あき）の一夜（や）、乳色（ちういろ）の夜靄（よもやた）立ち罩（こ）めた上（シヤンハ）
 海（イ）のあの茶館（ツアコハン）の窓際（まどぎは）で聞（き）いた麻雀牌（マアジヤンパイ）の好（この）ましい音（おと）は今（いま）も
 僕（ぼく）の胸（きようてい）底（なつか）に懐（しなふう）しい支那風（しなふう）を思（おも）ひ出（だ）させずにはおかない。

2

女（をんな）と、ばくちと、阿片（あへん）と、支那人（しなじん）の一生（しやう）はその三つの享（きやう）樂（うらく）

の達成たつせいに捧げささられる——などと言ふと、近頃ちかごろの若い新わかしい中あたら
 うくわみんこく 華民國ひとたちの人達しから叱しかられるかも知れないが、これは或ある點てん
 まで殘念ざんねんながら眞實ほんたうらしい。苦力クウリイ達は營營えいえいと働はたらく、女をんな—
 —細君さいくんを買かひたいために、ばくちをしたいたために、阿片あへんを吸すひ
 たいために。また將相しやうしやう達はなぜあれほど主權しゆけんを争あらひ合あふ
 のか？ 多くの婢妾ひせうの肉にくに倦あきたいたために、ばくちに耽ふける悠悠いういう
 閑日月かんにちげつを自由じゆうにしたいたために、豪華がうくわな廊房らうぼうで阿片あへんの夢ゆめに浸ひた
 りたいために。で、それほどばくち好きずな支那人しなじんが工夫くふう考案かうあんし
 たものだけに、麻雀マアジヤンほど魅力みりよくのある、感じかんのいい、倦あくこ
 とを知らない遊あそびはまア世界せかいにもあるまいかと思おもはれる。近頃ちかごろ、
 歐米おうべいでは一時じの麻雀熱マアジヤンねつがさめてブリツヂ・ポオカアの遊あそび

に歸つたと言ふし、日本でも花合せの技法がずっと深奥複雑（かんきようぶく）でより感興深い（かんきようぶか）ことを説く人もあるが、麻雀（マアジャン）には遊び（あそ）びの魅力は魅力として、外（ほか）にあの牌（パイ）に觸れるといふ不可思議（ふかしぎ）な魅力がある。あの牌音を聞くといふ力強（ちからづよ）い魅力がある。だからこそ、麻雀は少し遊びを覺えると、大概の人が一時熱病的（しねつびやうてき）になつてしまふ。そして、全くこれほど遊び倦（あ）ることを知らない遊び事もちよつと外（ほか）には無（な）ささうだ。

一代の覇圖も夢物語（ゆめものがたり）に奉天城外（ほうてんじやうぐわい）の露と消えてしまつたが、例の張作霖（ちやうさくりん）は非常な麻雀好きだつたと言ふ。何でも第二次奉直戦争（だいにじほうちよくせんさう）の時などは自分（じぶん）の方（ほう）の旗色（はたいろ）がよかつたせゐもあつただらうが、戦線（せんせん）のことは部下（ぶかまか）任せにして置いて、宮

苑うゑんの奥おく深くお氣きに入いりの嬪ひん妾せうや嬖へい臣しん達たちを相あひ手てに日ひもす夜よもす麻マ雀アジヤンに耽ふけり樂たのしんでゐたと言いふ。で、そこはまた拔ぬけ目めのない所いはゆる謂せい政しやう商しやうなどは莫ばく大だいもない金かねを賭かけて張ちやうと卓たく子しを圍かこむ。そして、わざと負まける。想さう像ざうすれば、始しじう終ちん青い一い色そをさせたり、滿まん貫ぐ役わんをつけさせたりするのだらうが、それが自然しぜんと取り入いとりの阿あ堵と物ぶつになることは言いふまでもない。

「いや、何なんとも何なんとも。今こん日にちの閣かく下かの昇しやう天てんの御おん勢いきほひにはわたくし共どもまるで木こつ葉は微み塵ちんの有あり様さまでございましたな。」

「ふふふ、弱よわいなうお前まへ等は……」

定さだめてあの張ちやう作さく霖りんがそんな風ふうに相さう好かうを崩くづしてのけぞり返かへつただらうと思おもふと、その昔むか馬ば賊ぞくの荒あら武むし者しやだつたといふ人ひとのよ

さも想像さうざうされて、無殘むざんな爆彈ばくだんに血染ちぞめられたと言いふその最後さいごが傷いたましくも感かんじられはしないだらうか？

張作霖ちやうさくりんと言いはず、如何いかに支那人しなじんが麻雀マアジヤンを好すくかといふ

ことはいろいろ話はなしに聞きくが、驚おどろくことは彼等かれら二日かも三日かも不眠ふみん不

休きうで戦たたかひつづけて平氣へいきだといふことだ。僕ぼく、この遊あそびを覺おぼえてか

ら足掛あしかけ五年ねんになるが、食事しょくじの時間じかんだけは別べつとして戦たたかひつづ

たレコオドは約やく三十時間じかんといふのが最長さいちやうだ。それはたしか去き

年ねんの春頃はるごろ、池谷信三郎いけのやしん ちゆうの家うちでのことで、前日ぜんじつの晝頃ひるごろは

じめて翌日よくじつの夕方ゆふがた過ぎまで八圈けんせん戦せんを五回くわいぐらゐ繰くり返かへした

やうに思おもふが、終をはりには頭朦朧あたまもうろうとして體からだはぐたぐたになつてし

まつた。そして、二三日にちその疲つかれの抜ぬけ切きらないのに今更いまさら自分じぶん

おろか
の愚さを悔いたやうな始末だつたが、支那人が二日も三日も戦ひ
つづけて平氣だといふのは、一つは確に體力のせるに違ひな
い。が、もう一つは氣質の相違によるものだらう。言ひ換へると、
支那人は技法の巧拙は別問題として、可成り自由に延び延び
と麻雀を遊び樂しむからではあるまいか？

ぼくおも
僕思ふに、いつたい僕等日本人の麻雀の遊び方は神經質過
ぎる。或は末梢的過ぎる。勿論技を争ひ、機を捉へ、相手を
ねらふ勝負事だ。技法の尖鋭慧敏さは如何ほどまでも尊ばれ
ていい筈だが、やたらに相手の技法に神經を尖がらして、悪打
を怒り罵り、不覺の過ちを責め咎め、自分の好運衰勢にだら
しなく感情を動亂させるなどは甚だしばしば僕のお眼に掛

かることだが、そして、僕ぼくと雖いへども敢あへてそれが全然ぜんぜん無いとは言い
 はないが、その如何いかにもあくせくした感じかんは常つねに僕ぼくをして眉まゆを顰ひそ
 めしめる。言いひ換かへると、どうもゆとりが無ない、棘とげ棘とげし過すぎる。
 だから、長ながい戦たひに堪たへ得えず、結け局つきよく心身しんしん共ともにくたくたに疲つか
 れ切きつてしまふのだらうが、思おもふに、支那人しなじんの麻雀戲マージャンギには彼等かれら
 の風格ふうかくに存ぞんするやうな悠いう悠いう味みがどこかにあるのではなからう
 か？

3

一時じ、これは麻マ雀ージャン界かいの論議ろんぎの的まとになつたことだが、麻マ

雀シが技ぎの遊あそびといふより以上いじやうに運うんの遊あそびであることは争あらそへない。
 實際じつさい、運うんのつかない時ときと來きたらこれほど憂鬱いううつな遊あそびはな
 いし、逆ぎやくに運うんの波なみに乗のつて天衣無縫てんいむほうに牌パイの扱あつかへる時ときほど麻雀マーシヤンに快
 い陶醉たうすゐを感じる時ときはない。自然しぜん、そこが麻雀マーシヤンの長ちやう所しよでもあ
 り短所たんしよでもあつて、どつちかと言いへば玄人筋くろうとすぢのガンブラアに
 は輕蔑けいべつされる勝負事しやうぶごとのやうに思おもはれる。けれど、實際じつさいはそ
 れこそ麻雀マーシヤンが人達ひとたちを魅惑みわくする面おもしろ白しろさなので、誰だれしも少すこしそれ
 に親したしんでくるといつとなくその日ひその時ときの縁起えんぎまで擔かつぐやうに
 なるのも愉快ゆくわいである。そして、その點てんでとりわけ物事ものごとに縁起えんぎ
 を擔かつぐ支那人しなじんが如何いかに苦心焦慮くしんせうりよするかはいろいろ語かたられてゐる
 ことだが、全まつたく外ほかのことでは如何いかなる擔かつぎ屋やでもない僕ぼくが麻マーシヤ

雀シの日ひとなると、その日ひの新聞しんぶんに出てである運勢うんせいが變へんに氣きになる。で、たとへば「思おもはぬ大利たいりあり」とか「物事ものごとに蹉跌さてつあり、せいはきやう西方凶せいほうきゆう」などといふ、考かんへば馬鹿ばからしい暗示あんじが卓子テーブルを圍かこむきもち氣持きもちを變へんに動うごかすこと我われながらをかしいくらゐだ。

滑稽こつけいなのは、日本にほんの麻雀道マージャンだうのメツカしやうの稱しょうある鎌倉かまくらでは

誰だれでも奥おくさんが懷くわい妊にんすると、その檀那だんな様がおほあた

をいすると言いふ。所ところが、何なんでも久米正雄くめまさを夫人ふじん自身のくわい懷わい妊にん中ちゆうの運う

勢せいの素晴すばらしかつたこといまは今いまでも鎌倉かまくら猛者もさ連れんの語かた草ぐさになつて

ゐるくらゐださうだが、懷ふに入いつてふとるといふ八卦はつぱでもあらう

か？ 少せう少せううがすち過すぎてゐて、良りやう人じん久米正雄くめまさをならずとも、

思おもはず微苦びく笑せうせずにはあらない。いつだれたい誰だれでも運勢うんせいが傾かたむ

てくると、自然しぜんとじたばたし出すのは人情にんじやうの然しからしむる所ところだ
 が、五段だん里見さとみ弾とんは紙かみ入いれからお守まもり札ふだを並ならべ出だす、四段だん古ふる川は緑りよく波ははシガアレツト・ライターで切きり火びをする。三段だん池いけ谷のや
 信三しん郎らうは骰子サイツを頭づじやう上うにかざして禮らい拜はいする。僕ぼくなど麻雀マージヤンはし
 ばしば細さい君くんと口喧嘩くちけんの種たね子こになるが、これが臨戰りんせん前まへだとき
 つと八卦はちが悪わるい。
 「今日けふは奇數きすう番號ばんがうの自動車じどうしやには絶對ぜつたいに乗のらないぞ。」
 向むかうに着つくまで猫ねこを見みなけりや勝かちだ。」
 などと年とし甲斐がひもなく男をとこ一ひと匹びきがそんな下くだらないことを考かんがへたりす
 るのも、麻雀マージヤンに苦勞くらうした人間にんげんでなければ分わからない味あぢかも知し
 れない。

4

「知らない支那人と 麻雀を遊ぶのはよつほど注意しなければいけない。」

とは或る向うの消息通が僕に聞かせた詞だが、ばくち好きで、またばくちの天才の支那人だけに麻雀道に於ても中には恐ろしい詐欺、いんちきを企てるものが可成りあるらしい。そして、その仕方しかたもいろいろ聞かされたが、僕が如何にも支那人式しなじんしきだなど一番感心し、且つ恐るべしと思つたのは、百三十六個もある麻雀牌ヤンパイの背中の竹の木目をすつかり暗記あんきしてしまふといふいん

ちき師しのことだ。而しかも、その暗記あんきの仕方しかたといふのが、先まづ日につくわ
 光うの中なかで、次つぎは曇くもり日び、次つぎは夕方ゆふがた、次つぎは電燈でんとう、結けつきよく局最さ
 後いごに蠟燭らふそくの光ひかりの中なかでといふ風ふうに明暗めいあんの順じゆんじよ序じよを追おつて眼めを
 慣ならしながら研けん究きう暗記あんきし、乏とほしい明あかるさの中なかでもこの木目もくめはこ
 の牌パイとすぐ分わかるやうに努力どりよくするのだと言いふ。言いはば勝かちたいと
 いふためのその執拗しつえうな努力どりよく、勿論もちろん外ほかの牌パイを使つかふことにでも
 なれば何なんの役やくに立たたう筈はずもないのに、そんな骨折ほねをりをするといふ
 根氣こんきよさ、陰澁いんじふさ、それが外ほかならぬ麻雀牌マアジヤンパイのあの木目もくめに對
 してといふだけに全まつたおどろ
 が、然しかし、それもこれもつまりは勝負事しょうぶごとに勝かちたいといふ慾よく
 と、誇ほこりと、或あるひは見得みえとからくるのかと思おもふと、人間にんげんの卑いやしさ淺あさ

ましきも少々どんづまりの感じだが、支那人の麻雀ばかり
 とは言はず、日本人のあの花合せにさへ實に多岐多様な詐欺、
 いんちきの仕方があるといふのだから、勝負事といふものが存
 在する限り止むを得ないことかも知れない。一時麻雀競技
 會の常勝者としてその技法をたゞ驚歎されてゐた某
 が、支那人式の仕方からすれば至極幼稚な不正を行つてゐたこと
 が分るし、結局麻雀界から抹殺されるに到つたなどは甚だ
 殷鑑遠からざるものとして、その心根の哀れさ、僕は敢へて
 憎む氣にさへならない。同じ不正を企るのならば、百三十六個の
 麻雀牌の背中の竹の木目を暗記するなどは、その努力感だ
 けでも僕には寧ろ氣持がいい。

にほんの マアジヤン 雀も 近頃ちかごろは 少々せうく猫も 杓子しやくしもの 感じかんになつて
 しまつたが、 僅かわづ四五年ねんほどの 間あひだにこれほど 隆盛りうせいを見た 勝負しょうぶ
ごと 事はあるまいし、 またこれほど 組織そしき立つて 麻雀マアジヤンを 社しやくわ會わい化
 したのも 日本にほんだけではあるまいか？ 圍碁ゐごや 將碁しやうぎや 花合はなあ合せ
 の 傳統でんとうは長い。 撞球どうきうにしてもそれが 今いまほど 一般ぱんてき的てきになるま
 へには二三十年ねんはかかつてゐる。 戸外こぐわいスポーツにしても、 野球やきう
 は 勿論もちろんだが、 近頃ちかごろそれと 人氣にんきを 角逐かくちくしかけて 來た 蹴球ききうに
 してもその 今こんにち日みを見るまでには 慶應義塾けいおうぎじゆく蹴球部しうきうぶの 隠かくれたる

なが、どりよく
長い努力があつた。が、マアジヤン麻雀は忽ちにして日本の社しやくわい會
に飛躍ひやくした。これは一面は明めんあきらに麻雀戲そのものの魅力みりよくからだ。
そして、一面は空閑緑くがみどり以下の識者しきしやの盡力じんりよくからに違ちがひない。
僕ぼくの知る限りかぎでは、日本のマアジヤン麻雀の發祥地はつしやうちは例れいの大震災だいしんさい
後に松山省三まつやまじやうが銀座裏ぎんざうらから移うつつて一時牛込じうしごめの神樂坂上かぐらざかうへ
に經營けいえいしてゐたカフエ・プランタンがそれらしい。勿論もちろん、個こ
個こに遊あそび樂たのしんでゐた人達ひとたちは外ほかにもあつたらうが、少すくなくとも麻マ
雀戲アジヤンぎの名なを世間的せけんてきに知しらせたのはどうもあすこだつたやうに
思おもはれる。その意味いみで、狭せまい路次ろじの奥おくにあつた、木造もくざうの、あ
のささやかな洋館やうくわんは日本にほん麻雀道マアジヤンだうのためには記念保存物きねんほぞんぶつた
る價値かちを持もつてゐるかも知しれない。

「どうも今考へると、をかしなことをやつてゐたもんだよ。」
 と、佐佐木茂索は或る時僕に彼らしい静かな笑ひを洩らしなが
 ら語るのだつた。

何でも市川猿之助と平岡權八郎が洋行歸りに上海で
 マアジャンパイを買ひうる覺えにその技法を傳へたのださうだが、集
 麻雀牌を
 るものは外に松山省三、佐佐木茂索、廣津和郎、片岡鐵兵、
 松井潤子、後に林茂光、川崎備寛、長尾克などの面
 面で、一筒二筒を一丸二丸、一索二索を一竹二竹といふ風に呼
 び、三元牌をされたあと残りの一枚を捨てると、それが積
 になり、その所有者に嶺上開花の機會を與へるので捨て
 られなくなるといふ風な妙なルウルもあり、何しろ近頃のやう

に明確な標準規約もなく、第一傳へる人がうろ覚えの怪しい指導振なのだから、ずるぶんをかしな戦ひを交へてゐたものらしい。

「林茂光がくるやうになつてから、だいぶすべてが調つて來たが、僕はその時分から大概負けなかつたよ。」

と、これも佐佐木茂索の自慢話だ。

その頃、それが賭博との疑ひを受けて、或る晩一同がその筋から取り調べを受けるやうな事件が持ち上つたが、取り調べる側がその技法を知らないで誰かが滔滔と講釋をはじめ、係官を烟に巻いたといふ一挿話もある。勿論、何の事もなく疑ひだけで濟んだのだが、一夜を思はぬ所で明かしてしまつた誰

彼、あまり寢覺めがよかつた筈も無いが、何でも物事の先驅者（や）の受難（じゆなん）の一卷（ひとまき）とすれば、近頃（ちかごろ）の仕合せ（しあは）な新しい麻雀（マアジヤン）好きの面面（めんめん）はすべてからくそれ等の諸賢（しよけん）に敬意（けい）を捧（さ）げて然（しか）るべきかも知れない。

6

日本の文藝的作品（にほんぶんげいてきさくひん）に麻雀（マアジヤン）のことが書かれたのは恐らく夏目漱石（なつめさうせき）の「滿韓（まんかん）とところどころ」の一節（せつ）が初めてかも知れない。無論（むろん）、讀書人（どくしよじん）夏目漱石（なつめさうせき）は勝負事（しやうぶごと）には感興（かんきやう）を持つてゐなかつたのであらうが、それは麻雀競技（マアジヤンきやうぎ）の甚だ漠然（はくぜん）とし

た、だんぺんてき断片的な印象をすうぎやうつゞ數行綴つたのに過ぎない。が、近
んだいにほん代日本のこの優れた文人の筆に初めてマアジヤン麻雀のことが書か
 れたといふのは不思議な因縁とも言ふべきで、カフエ・プラン
はじタンで初めてマアジヤン麻雀を遊んだ人達ひとたちに文人、畫家が多かつた
 といふのと相俟つて、マアジヤン麻雀と文藝との間には何か一種のつ
 ながりがあるやうな氣持さへする。それにさすがは文學の國支
な那の遊びで、役の名やくなに清一色とか、コオシフウサン國士無雙とか、ハイチイラオ海底
イエ撈月とか、リンシヤンカイホウ嶺上開花とか、スウシイリンメン四喜臨門とかいふやうな如何に
しみも詩味のある字句じくを使つてあるのも面白おもしろい。恐らくこれ等の字
つに就いての感じかんが分るといふだけでも僕等ぼくら日本人ほんじんは歐米人おうべいじん
ち達よりもずつとずつとマアジヤン麻雀を味あぢはひ樂たのしみ方かたが深ふかいだらうと

想像さうざうされる。

さて初はじめに書かいたやうに初はじめて麻マアジヤン雀パイ牌パイを見みて、その牌パイ音おとを聞きいたといふだけなら、僕ぼくは近ちかごろ頃マアジヤンの麻マアジヤン雀パイ隆りう盛せいにいさゝか
 ささが先さき駆かけるものだつたが、初はじめて牌パイを手てに入いれたのは大たい正しやう十
 四年ねんの秋あきで、それから誰たれに教をそはるともなく次第しだいに習ならひ覺おほえて、去き
 年よねんあたりちよつとその熱ねつびやう病き期きだつたとも言いへる。そして、近ち
 かごろ頃かごろはだいぶ技ぎ法はふにも自じ信しんを得えて來きたが、運うんに左さ右いうされてしまふ
 或ある境きやう地ちだけはどうにも仕しか方たがなく、時ときにあまりに衰すゐ運うんに沈ち
 んめんんめん 洩まさせられると、ちよつと麻マアジヤン 雀パイにも嫌げん 厭えんたるものを感じかん
 る。けれど、二三日にちもたつともうそろそろむづむづしてくるのだ
 から、この熱ねつびやう 病なまや 生ま 易やさしいことではなかなか全ぜん 快くわいしさう

にもない。

相手方も勿論仲間内に多く、始終顔を合せるのが六段佐

さきもさく、三段和木清三郎、三段池谷信三郎などで、時に六段

きくちくわん、五段廣津和郎、七段川崎備寛、六段濱尾四郎、四

段古川緑波、五段菅忠雄などといふ所、そして、そんな風

に書き並べてみると、素晴らしい名人試合ばかりやつてゐるやう

だが、時に手に汗を握るやうな亂牌振も見られ、ば、颯爽た

る一人拂ひ、思はず頤を解くやうな沖和もある。それに大

概腕よりもより以上に口の達者な面面が多いのだからそ

の騒々しさも以て察すべきである。そして、たとへば、たと

へばと諸賢のの麻雀振も紹介する積りだつたが、ちやう

ど許ゆるされた枚まい數すうにも達たつしたし、あとの崇たりも恐おそろしいので。
(昭五・三・三)

青空文庫情報

底本：「改造」改造社

1930（昭和5）年4月1日発行

初出：「改造」改造社

1930（昭和5）年4月1日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「黄包車」（ワンポイソオ／ワンポオツ）、「卓子」（テーブル／たくし）、「茶館」（ツアコブン／ツアコハン）、「麻雀」（マアジャン／マージャン）など、一部のルビに異なった表記が

みられますが、底本通りに入力しました。

※「茶館」のルビ「ツアコブン」の「ブ」は印刷の具合が判然とせず、「フ」もしくは「プ」にもみえます。

入力：小林徹

校正：鈴木厚司

2008年1月26日作成

2010年11月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

麻雀を語る

南部修太郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>